

シュタイフターについて(一) : 三月革命をめぐる

西田, 越郎

<https://doi.org/10.15017/2332938>

出版情報 : 文学研究. 43, pp.68-81, 1952-03-10. 九州文学会
バージョン :
権利関係 :



シュティフターについて（一）

——三月革命をめぐる——

西 田 越 郎

一

われわれは、オーストリアの詩人アーダルベルト・シュティフター Adalbert Stifter (1805—1868) の生誕百五十年の記念すべき年を、間もなく迎えようとしている。緑の美しい森につつまれ、モルダウ川の清い流れに臨んだボヘミヤの市場町オーベルプラインに生を享けたこの詩人の作品に親しむとき、われわれはその中から聞え来るドイツの森のざわめきに耳を傾けずにはいられない。そしてそれを通して感ぜられる偉大にして静かな自然の営みは、読者の魂に力強く迫つて、慰めとはげましとを与えるのである。

シュティフターがわが国に紹介されてから、まだ十数年にしかならないが、極く少数の人たちの努力によつて、主要な作品はほぼ反訳されている。晩年に完成された龐大な二つの長篇小説「ヴィティコー」と「晩夏」のうち、後者の反訳が最近わが読書界に提供されたことは、彼の文学を愛好する者にとつて何よりもよろこばしいことであつた。彼の作品は時代を超えてその圈を抜けてゆく。しかしわが国においては、まだ彼についてのまとまつた大きな研究もなく、なお幾多の研究

の余地を残しているように思われる。

われわれのもとでこのように日の浅いシュティフターは、その生国でも厳しい運命を辿らなければならなかつた。この世にあつては広汎な読者に熱狂的な支持を受けながら、死後、時とともに忘れられて、今は文学史の片隅に僅かにその名をとどめているといった詩人・作家がある。しかしまた、一度びかゝる運命に見舞われながらも、再びその眞価を認められ、時代とともにその光芒を増して来る者もある。ジャン・パウルやヘルデルリンなどと同じく、シュティフターもその一人であつた。「晩夏」や「ヴィティコー」は出版当時、批評家にも読者にも余り受けがよくなく、彼を非常に落胆させたのだつた。死後に及んでは、彼の名前すらほとんど忘れられてしまふ有様だつた。たとえ彼が問題になつたとしても、ボヘミヤの森の隠遁詩人と呼ばれたり、或は描写の大家ではあるが、われわれが見ているものを見ているだけで、その描写には魂が附与されていないという風に批評された。概ね十九世紀の文学史家からは軽視されたといつてよからう。この半ば埋没したシュティフターが、国民詩人として再評価を受けて浮かび上つたのは、彼の生誕百年を契機としてであつた。最も事実即した信用すべき彼の伝記を著わしたA・L・ハインは、シュティフター・ルネサンスと言つたが、今や彼はドイツ文学において不動の地位を得ることになつたのである。自分の作品は道徳的表白として変らぬ地位を見出すであらうと確信の程を示した彼の言葉は、見事に実現したのである。ニーチェが「人間的な余りにも人間的な」において、「晩夏」をドイツ散文の財宝と激賞したことは余りにも有名であるが、ニーチェとシュティフターについては、エルンスト・ベルトラムがその著「ニーチェ」に「晩夏」の一章を設けて述べている。

「晩夏」を評して、この小説を最後まで読み通した者がいたら、ポーランドの王冠を約束してもよいと嘲弄したヘッペ

ルならずとも、彼の作品の冗長さの故に読者は退屈を覚えるかも知れない。そこに現代小説的なものを求めるものは、恐らく失望を味わうであらうし、また彼の文学は齢を重ねると共に理解される老年の文学なのかも知れない。ともかく、新しく見直されたシュティフターの文学は、その高貴な敬虔さと純粹な道徳性をもつて、永遠に人の心を促え、もはや忘却されることはないであろう。シュトリヒは、今日ほどシュティフターの *Magische Anziehungskraft* を感ずる時はないと言っている^①。時代が喧騒の度を加えれば加えるほど、シュティフターの靜かな平和な世界へわれわれの目は注がれるのである。クルックホーン等によつて唱道されたビーダーマイヤー (Biedermeyer) 時代に属する詩人として、メーリケやドゥロステーヒュルスホフとともに、愈々高く評價され、殊に第二次大戦以後、彼に關するおびたしい文献がドイツで出版され、シュティフター研究が着々進められていることは、彼に對する関心の深さを示すものであらう。

シュティフターについて述べるとき、必らず引き合ひに出される有名な彼の言葉がある。それは小説集「とりどりの石」(Bunte Steine) に附せられた序文である。彼の描くものは「たゞ小さなもののみであり」、彼の描く人間は「つねに平凡な人々ばかり」だという非難に答えて、彼の見解を述べたものである。彼と相容れなかつたヘッペルを彼が念頭においていたことは言うまでもない。この Vorrede が書かれたのは一八五二年の秋であつた。この日附をわれわれは看過してはならない。彼自ら、その最後に記しているように、「最近数年の体験」、すなわちその四年前の三月革命及びそれ以後の体験を念頭におくことが必要である。こゝに述べられたシュティフターの文学觀・人生觀は、彼の魂を揺り動かした数年間の体験が裏づけとなつていのである。彼はその序文のなかでいつてゐる。

「風のそよぎ、水のせゝらぎ、穀物の成長、海の波だち、大地の緑、空の輝き、星のまたゝき、それらを私は偉大だと

思う。すさまじく過ぎゆく雷雨、家々を引きさく稻妻、波をうち砕く疾風、火を噴く山、大地をゆるがす地震、それらをさきの現象より偉大だとは思わない。それらは遙かに高い法則の作用にすぎないのだから、むしろ小さいものだと思う。……………外なる自然においてそうであるように、また内的自然たる人間のそれにあつても同様である。正義、單純、克己、分別、自己の範圍内での倦まぬ活動、美を感じる心などにみち、晴れやかで落ちついた努力と結合した完全な生活を私は偉大だと思う。心の激動、恐ろしく迫り来る憤怒、復讐欲、行動をめざして荒れ狂い、ひき裂き、変革し、破壊し、しばしば激昂のあまり自己の生命すら投げうったりする燃えたつた精神を、より偉大とは思わない。むしろ小さなものとするのである。これらは嵐や火山や地震などと同じように、個々の一面的な力の發現にすぎないのだから。われわれは人類を導く柔和な法則を見ることに努めたいと思う。」

この「柔和な法則」(Das sanfte Gesetz)こそ、彼の生涯を通じて變ることのなかつた、そして彼のすべての作品を貫く糸なのである。

二

従来わが国においては、三月革命を中心とした歴史的研究は余り顧みられていなかったようである。戦後に至つてこのテーマが取り上げられたことは仄聞しているが、まだ大きなまとまつた研究は見あたらない。先にふれたドイツ文学史におけるビーダーマイヤー時代は、一八二〇年から五〇年に至る約三十年間を指す(この時代区分については種々の説があるが、こゝではクルツクホーンの所説に従つておく²⁾)のであるが、一八四八年前後をドイツ文学史における一つの転換期と

見ることが出来るであろう。革命前の時期、いわゆる Vormärz 及び革命後の時期の歴史的・思想史的研究は、歴史研究家と文学研究家との共同研究を要する問題ではあるまいか。

さて周知のごとく、一八四八年のドイツ革命運動は、革命というよりはむしろ騷擾といった方が適當と思われる突発的なものであつた。二月二十四日のパリ暴動の報は、ドイツ諸邦における革命運動の合図となつた。それは熱狂的なものであり、ウィーンを始め、ミュンヘン、ベルリン等にも暴動が起つた。交通機関の発達による経済的変動、またそれに基づく労働階級の悲惨な生活によつて、革命運動の思想的準備はなされてゐた。民衆の反抗は王室と政治制度とに向けられた。オーストリアの宰相メッテルニヒはウィーンを逃れた。五月には、始めての普通選挙による議会がフランクフルトに召集されたが、これは眞にドイツ民衆の意志を代表するものではなく、たゞ徒らに学問的討議にふけるのみで、翌四九年に議会は解体してしまつた。かくてドイツの統一と自由とを求めた市民階級の闘争は遂に失敗に終つたのである。

シュティフターと時代を同じくするグリルパルツェルやフォイヒタースレーベン Ernst Freiherr von Feuchtersleben (1806—1849) 或いはわが国ではほとんど知られてゐないライムント Ferdinand Raimund (1790—1836)・ネメト・ヨハン Nepomuk Nestroy (1802—1862)・シュエレンフェルト Eduard von Bauernfeld (1802—1890)・マリエン Anastasius Grün (1806—1876) など、この時代の詩人を通じて、政治への関心の深かつたことを一つの特徴として挙げる事が出来るよう。politisch すなわち biedermeierlich といつても差支えないのではないかと思う。

ではシュティフターはこの革命をどう見ていたのだろうか。それを考察するに先だつて、彼が生きていた時代を検討し、また当時の文学に対する彼の見解を明らかにしておくことも無駄ではあるまい。彼が生きた時代は、われわれが彼の作品か

ら感ずる牧歌的世界とはおよそ異つた混乱した時代だつた。彼の幼少時代はまだナポレオン戦争の頃であり、またその没落後もヨーロッパの政情は、表面的には小康状態を保ちつゝも、危機をはらんだ不安な時代である。やがて三月革命を経て、オーストリアはハンガリー、チェコの暴動を鎮圧せねばならず、また四八―四九年及び五九年にはイタリアと争ひ、六六年にはプロイセンに敗北するというように祖国オーストリアが苦難をなめた時代だつた。殊に最後の事件は、それから二年後に死んだシュティフターにとつて悲痛な出来事であつた。

政治の面で混沌としていたこの時代を、ひるがへつて文学の方から眺めてみよう。一八三〇年以後、一世を風靡した浪漫派は、既に衰頹期に入つていたが、まだその空想主義の勢は侮りがたいものがあつた。一方においては、浪漫派に対抗して民主主義を標榜する「若きドイツ」Das Junge Deutschland が擡頭し、ハイネ、グツコウ、ラウベなどが現実の政治的・社会的問題を取扱う文学を唱えていた。すなわち新旧二勢力が拮抗する時代だつたのである。シュティフターは、この新しい文学傾向に対して如何なる態度をとつたであらうか。彼は文学に政治を接近させることは邪道とみなして、「若きドイツ」と対立した。一八四五年一月九日ヘッケンアストに宛てゝ言つてゐるように、文学に現実の時事問題を混入すること、例えば神や世界の美さを描くべきところに関税同盟についての自己の見解をさしはさむというようなことを好まなかつた。さればといつて、彼が政治に全く無関心だつたのではない。ウィーン大学の法科在学中（一八二七―一三）には、好んでその方面の講義をきき、その後も政治学の研究を続けている。またヘッケンアスト宛に、「文学における政治について」という論文の予告もしている。むしろ彼は人一倍政治に興味を持ち、機会有る毎に政治について語らずには居れなかつたようである。書簡を読むと、政治問題に脱線しては恐縮してゐる彼のユーモラスな姿を随所に見

出すことが出来る。

シュティフターが作家として登場したのは、一八四〇年すなわち三十五才の時であつた。従つて年齢から言えば、そのデビューは決して早くはなかつた。しかも彼は、滑稽ともいへべき偶然の機会に詩人としての才能を発見されたのだつた。その発見者たるミンク男爵夫人と「ウィーン雑誌」の編集者ウィットハウエルとの尽力によつて同誌上に彼の最初の作品が発表された。これが「禿鷹」(Der Kondor)である。こうした作家としての生涯を踏み出すまでの彼の生活は決して恵まれたものではなかつた。すなわち三十七年に結婚した妻のアマーリエ・モハプト(Annie Mohaupt)を抱えて個人教授による僅かな収入をたよりに苦しい生活が続ける傍ら、彼の理想でもあり、また自己の幸福な未来をそこに夢みていた画業を断念出来ないで、苦しいなかにも画筆を持ちつづけたのだつた。しかしこれは、後に詩人として世に現われた彼を益するところ大きなものがあつた。今や処女作の発表によつて、彼の生涯は決定された。これまで彼の内部に貯えられていた力は、忽ち結実して、溢れるが如く数多くの作品となつて現われた。すなわち四〇年には *Feldblumen*, *Das Heidevögelchen*, *Der späte Pfennig* とうように、矢つぎばやに発表され、異常な共感をよんだのであつた。やがて四四年には *Brigitte*, *Der späte Pfennig* とうように、矢つぎばやに発表され、異常な共感をよんだのであつた。やがて四四年にはグスタフ・ヘッケンアスト(Gustav Heckenast)によつて、「禿鷹」から「愚人の城」に至る作品を収録し、「習作集」(Studien)と題して、その最初の二巻が出版された。更に四七年には第三・四巻が続刊された。(なほ最後の二巻は一八五〇年に刊行され、習作集は前後六年の日子を費して完結した。)

作家として登場した一八四〇年から、彼の母と弟妹とに「最初の試み」(erste Versuche)として捧げられたこの二

まじい作品集 *Studien* が發表された四七年に至る八年間は、彼の生涯において最も幸福な、最も実り豊かな時期であつた。これは、彼自ら命を絶つ原因ともなつた宿痼に苦しめられ、また養女を二人までも失つたことによる精神的打撃や、また彼の心を最も暗くした祖国オーストリアのプロイセンに対する敗北（一八六六年）に悩む晩年の十年間と比較するならば、一層明瞭となるであらう。

この祝福されたシュティフターを突如襲つて、やがては彼を絶望の淵に投げ込んだのは三月革命だつた。リンツで靜かに著作と研究に専念して四七年の夏を送つた彼は、再び冬を過すべくウィーンに歸つた。当時彼は或る新聞から依頼された文学・芸術に関するエッセーを書くために、その準備を整えていた。また長年の念願であつたイタリー旅行が実現される見込みについて、彼の生活は光明を加へて來た。しかしこの二つの計画も革命のあらしのために中絶の止むなきに至つた。

三

シュティフターは、メッテルニヒの反動政策によつて祖国オーストリアが陥つてゐるみじめな政治状態に気づかなかつた訳ではない。既に彼は忌憚のない批判を加へていた。しかしそれを直ちに改善すべき方策は彼にも持たせがなかつたであらう。

シュティフターは三月革命当初の成果をよろこんでゐる。それは後にベッティ・パオリ *Betty Paoli* が彼に宛てた手紙のなかで

「あなたは、私が三月十五日の朝あなたの処へ伺つて、お互に新しく得た自由をよろこび合つたことを覚えてをられますか。私は決してそれを忘れないでしょう。何故ならこの日こそ、理想が実現されたのを私たちが見る稀な一日なのですから。」

と言つてゐることに照らしても判る。

シュティフターは三月革命以前には保守派の人々たちから自由主義者と見られていた。しかし新らしく得た自由を手放してよろこんでは居られなかつた。彼の内部には未来に対する懸念が高まつて来る。「建物は破壊されたが、さて誰がその瓦礫を片づけるのだろう。そして新しく建て直す力と使命とを持つ人たちはどこにいるのだろうか。」と、当時彼の家に滞在していたヘッケンアストに語つた。「政治について何もわかつていない連中」の挙げる「騒々しい怒号」は彼をして文筆にたずさわる者の責務の重大さを痛感せしめた。

「若しも文筆家が、その言葉の輝かしい剣によつて軽卒な誤ちを拵げ、禍を惹き起したら、その責任はいかに恐ろしいものだろう。」

とは彼が当時書いた *Über Stand und Würde des Schriftstellers* の中の言葉である。

革命の経過は彼にとつて全く幻滅だつた。彼は自由 *Freiheit* と放恣 *Willkür* とをはき違えた民衆の動きを注目しながら、わが足下の大地が崩れてゆくような氣持がしたのである。そしてこれが彼をして、政府の委託により民衆の政治的教育に従事する動機となつた。彼は四八年から四九年にかけて、数多くの論文を執筆して、自己の見解を表明した。それは政治及び教育制度に関するもので約百篇に近く、全集第十六卷、雜文集第三部に收められている。この時期に、彼が諸

新聞に発表した論文の「す」特に注目すべきものを挙げて置く。

Über Stand und Würde des Schriftstellers / Der Staat (以上四八年) Wiener Stimmungsbild, / Die oktroyierte Verfassung / Über die Befürchtung eines unglücklichen Ausganges in Ungarn / Über Palmerstones Rede / Was ist Freiheit? / Wie wird Freiheit eingeführt? / Wer sind die Feinde der Freiheit? / Wen man nicht wählen soll / Die Zukunft des menschlichen Geschlechtes / Vergleichung unserer Lage mit der des alten Römerreiches / Noch ein paar Merkmale über unsere gegenwärtige Lage / Über unsere gegenwärtige Lage / Mittel gegen den sittlichen Verfall der Völker / Noch einige Mittel zur Verbesserung unserer sittlichen Lage / Schluß wort über unsere sittliche Verbesserung. (以上四九年)

これらの諸論文は、勿論啓蒙的效果を狙つたものであるが、いずれもシュティフターが革命の逸脱を戒しめる目的をもつて書かれたものである。以下これから窺われる彼の見解を紹介して、若干の考察を加えたい。

詩人であり、また Schulmann であり、Erzieher であつたシュティフターの存在は、これをどれ一つ切り離しても考えることは出来ない。彼にとつては芸術や文学の創造を通して人間の品位を高めることが、第一の問題であつた。教育者として祖国オーストリアのために奉仕することを、時代に対する自己の責務と考えていた。彼の中には人間の道德的使命に対する固い信念があつた。彼は云う、

「自分が望んでいる段階にまで、一挙に人間を押し上げることが出来たなら、よろこんで自分の血を捧げよう。」
たとえその成果はさうやかであらうと、彼の努力はつゞましくこの方向にむけられていた。

シュティフターが最も歎わしく感じたのは、先にも述べた「自由」と「放恣」との混同であつた。彼は「言葉の混乱」

(Die Sprachverwirrung. 1849) という論文を別に書き、いつの時代にも言葉の扱い方を知らず、愚かしい意味を言葉に附与する人が沢山いるものだが、昨今われわれの間に見られた混乱は危険を産んで、不測の禍をもたらす懼れがあつた、それは言葉に誤つた意味を与えた人々が、その意味を実行に移したからだ、と言つて警告している。「自由とは何か」において彼は、この偉大にして神聖な「自由」を理解し、言葉の眞の意味において「自由」を語っている人がどれだけであるだろうかと慨歎し、

Das ist die menschliche Freiheit, daß keiner den Menschen in der Pflicht der Sittlichkeit und Tugend stören darf.

と定義して眞の自由こそ最大の自制を求めるものだと言う。前に列挙した諸論文の基調をなすものは節制 die Mäßigung である。彼は一八四八年七月二十八日附ヨーゼフ・テュルク宛書簡に言う、

「全ドイツを通じてわれわれに必要なものは性格です。岩のように堅い節操と揺るがぬ徹底さが、今こそ學問や知識より大きな、永続的な働きをするだろうと思います。」

シュタイフターは、彼のいわゆる「純な存在」(ein reines Sein) が靜かな發展をする時にはじめて成長と認めるのであり、それによつてのみ變革がなしとげられ、理性と人間性のみが勝利を得るのである。

「理性の欠除、空ろな熱狂、更には邪惡、空虚、そして遂には犯罪までが幅をきかせて世界を占有したとき、私の胸は文字通りはりさけんばかりだつた。……美しいもの、偉大なもの、人間的なものはすべて消え失せ、心情は攪亂され、文學は退いた。」

この言葉は革命に対する期待を裏切られた彼の気持ちをよく現わしてはいないだろうか。シュティフターは自ら云うように、自分でも予想しなかつた程の注意と感動とをもつて事態の推移を見まもつた。「私は節度と自由の人間です。」(Ich bin ein Mann des Mäßes und der Freiheit.) これは悲痛な言葉である。革命の体験が彼の中からこの言葉を押し出したといえるだろう。この「節度」と「自由」の二つこそは、彼には人間の眞実の Bildung の基礎と考えられた。

一八六六年に書かれ、シュティフターの死後、友人ヨハネス・アプレントの編纂になる小説集におさめられた短篇「ゼンツェ家の接吻」(Der Kuß von Sentze) のなかで、ゼンツェ家の記録の筆者ルーペルトをして言わしめている言葉は注目に値しよう。

「どんな暴力にもまどわされず、人間性の最高のものを發展させる力としての自由は、人間のもつ最大の財宝です。眞の人間は心の欲情や惡徳から自由であり、いま言つた自由のために余地を作らうとするものであり、もしそう出来ない時には彼はもう生きてはいないでしょう。その意味で自由でない人間は、また他の意味でも自由ではあり得ないのである。他の自由というのは、自己の本能のまゝに従う動物の自由のことです。わが国にもこの自由を促進し、この自由のために国家生活への道をきり開いて、自由が美しく花さくように努める人たちのあることを望みます。それまでの位かゝるか、それは判りません。今日自由を叫んでいる人々の大多数は、まだ榮譽と利益と權力とに対する自己の欲望にしばられています。抑圧に対して立ちながら、自ら抑圧者なのです。……」

道義、神聖、芸術、神祕なものが最早存在せず、あらゆる汚穢や獸性が支配する混沌の時代を克服して立上る力を彼は一体どこに求めたか。一八四九年三月六日ヘッケンアストに宛て、自由の理想を達成するための唯一の方法は Bildung

であると強い調子で語っている。そしてかゝる *Bildung* の基礎をつくることが、「国家」の本質であり使命であるとする。シュティフターのかゝる国家観の根底をなすものは、人間性の完成に対する彼の堅い信念であつた。前記諸論文と時を同じくして書かれた幾篇かの教育に関する論策も、社会革命を要せず、専制的反動のない完成した *Bildung* の国家を求める彼の熱情の反映に他ならない。

四

さて彼は革命のあらしを避けて、リンツへ逃れ、創作に精進して魂の平靜を取り戻そうとした。彼は既に四八年五月に「ローゼンベルク」という作品に取りかゝつてゐることを報じている。これは彼の最後の作品となつた歴史小説 *Witiko* の前身である。この大作の構想は一八四七年まで溯ることが出来るのだが、「晩夏」のために一時中絶され、五九年から再び筆をすゝめ、六五―六七年にわたつて三部に分かれて出版された。バイエルンとチェコに接したボヘミヤの南隅を舞台に、十二世紀を時代にとつたこの長篇は政治的テーマ、すなわち協同体の問題を取り扱つてゐる。この作品が、ほゞ三月革命と時を同じくして胚胎されたことを考えるなら、この革命が政治的テーマを取り上げる動機となつたことは明らかであろう。われわれはヴィティコーにおいて、シュティフターの政治的世界観より形成された理想像ともいふべきものを認めることが出来る。「ヴィティコー」に描かれた道徳的基礎の上にたつ国家形態が、すなわちそれに他ならないのである。シュティフターの三月革命に対する態度には非時代的 *unzeitgemäß* な点が多々指摘せられようが、とにかく国家や民族の問題における彼の倫理的態度がこの体験を経て一層鍛え上げられ、「ヴィティコー」という一つの実を結んだと言

うことが出来ると思う。今回は作品そのものに即して、その道德的世界觀を考察してみたい。

註 (一) Fritz Strich: Der Dichter und die Zeit. Bern 1947. S. 293.

(二) Paul Kluckhohn: Biedermeier als literarische Epochenbezeichnung. (Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte. 1935. Heft 1.) S. 37.